

マダクロホシタマムシの生態

熊本県林業研究指導所 久保園正昭

1. はじめに

1991年9月に襲来した台風19号は全国各地に大きな被害をもたらした。

本県における森林被害も甚大で、県北部を中心に、多くのスギ・ヒノキ被害木が発生した。

これら被害木に対して病害虫の発生が危惧されたため、林内またはその周辺に放置されたままの被害木や土場に野積みされた皮付き丸太の調査を行ったところ、多くの種類の害虫の加害が認められ、その概要については、前年、報告した。¹⁾

それらの害虫のうち、マダクロホシタマムシは林分の強度の枝打ち、間伐または林道開設など、急激な環境変化により生理的に異常となった木に多く発生するといわれているが、今回は生態について調査したので、その概要を報告する。

2. 調査方法

- (1) 調査時期
1992年12月～1993年9月
- (2) 調査場所
熊本県上益城郡甲佐町
- (3) 林分の概要
昭和40年代に設定されたヒノキ採種園(0.57ha, 340本)で台風19号により、根返り木を中心に傾斜木、幹折れ木等約40本の被害木が発生した。
- (4) 被害木の搬入と調査
1992年12月に、完全枯損木のなかから無作為に選んで伐倒、玉切り(長さ1.2m, 平均直径9.1cm)して35本を持帰り、構内の屋外あみ室に搬入した。
1993年4月以降、成虫の発生状況、発生した成虫の体長等について調査した。
- (5) 新しい被害木の発生調査
ヒノキ採種園の、マダクロホシタマムシが寄生している枯損木を中心に、周辺木への被害の拡大状況を調査した。また、主として潮風害を受けて枯損

した海岸沿線のヒノキ林も同様の調査を行った。

3. 調査結果と考察

- (1) 成虫の発生消長
屋外あみ室内の被害材(長さ1.2m, 35本)から羽化する成虫の発生状況を毎日調査した。
その結果は図-1のとおりで、5月2日から発生しはじめ、5月中旬にかけて急激に発生数が増加し、中旬がピークとなり、その後は急激に減少しはじめ、6月に入ると発生数は少なく、6月10日に終息した。
マダクロホシタマムシ成虫の発生期間は約40日で、発生は5月初旬にはじまり、中旬頃までの2週間に急激に増加するものと推定される。
なお、5月下旬にニホンキバチ3頭の成虫発生を確認した。
- (2) 成虫の脱出孔数調査
成虫の発生消長調査を行った被害丸太(35本)について、成虫の脱出終了後、脱出孔の調査を行った。
成虫の脱出孔総数は2130個で、被害丸太1本当りの脱出孔数は平均61個(11～177個)と、多くの成虫が発生した。
- (3) 成虫の体長
脱出した成虫のなかから658頭を選んで、体長の測定を行った。
その結果、最高13.4mm, 最小6.4mmと個体差が大きかったが、平均体長は10.0mmであった。
成虫は金色～赤橙色を呈し、背面の斑紋は個体変化が大きい。
- (4) 新しい被害木の発生調査
台風19号により発生した被害木を中心に、周辺木への被害の進行、拡大状況を調査しているが、1993年9月現在では新しい被害木の発生は殆ど認められない。
また、主として潮風害を受け枯損したヒノキ林を対象に同様の調査を行っているが、現在のところ、新しい被害木の発生は殆どみられない。

4. 考察と今後の問題点

台風19号により枯死したヒノキ被害木を網室に集め、マスダクロホシタマムシ成虫の発生状況を調査したところ、成虫は5月より急激に発生しはじめ、中旬にピークとなり、その後急に減少して6月中旬までに終息した。

成虫の発生期間は約40日間と、5月中旬を中心に短期間に集中的に発生することがわかった。

しかし、野外に放置された、被害材の樹皮下の幼虫の調査を行うと、体長の異なる様々の幼虫が混在することから、自然状態での成虫脱出は相当長期におよぶ

ものと推測される。

なお、前年の調査で、マスダクロホシタマムシは外見上健全と思われるが根返り木にも寄生が認められたことを報告したが、今回の調査では周辺木への影響と思われる兆候は認められなかった。

しかし、本年5～6月に発生したマスダクロホシタマムシの密度の今後の変化および周辺木への影響など、その発生動向を監視する必要がある。

引用文献

- (1) 久保園正昭：日林九支研論，46，175～176，1993

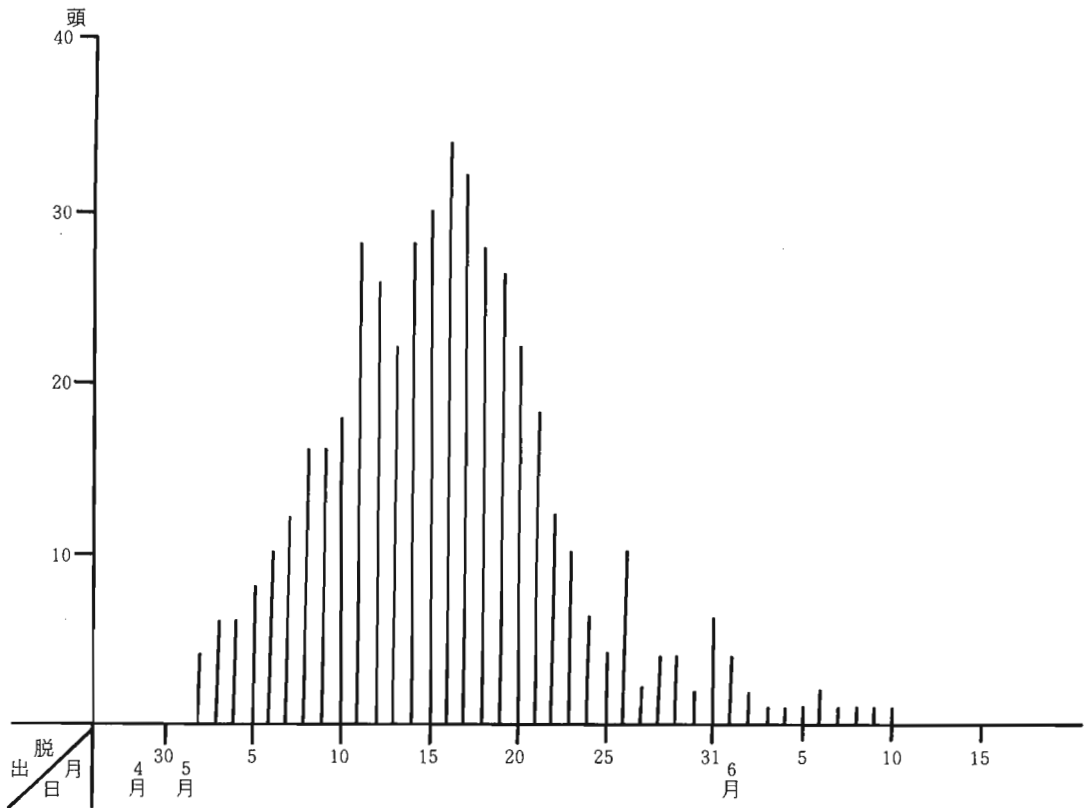


図-1 マスダクロホシタマムシの発生状況